



Title	インタビュー 磯野富士子先生と『オルドス口碑集』 (2000年12月1日 大阪外国語大学)
Author(s)	芝山, 豊
Citation	モンゴル研究. 2008, 25, p. 46-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102352
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《資料》

インタビュー

磯野富士子先生と『オルドス口碑集』

(2000年12月1日 大阪外国語大学)

2000年12月1日、磯野富士子先生は、ご自身が編集されたデロワ・ホトクトの回想録などの書籍の他、大切にしておられたオーエン・ラティモアゆかりの品々を旧大阪外国大学図書館に寄贈された。その中には、ラティモアが徳王から拝領した品々や、ハズルンドとラティモアの友情の証で、磯野先生が『図書』に書かれたニルギトマ王女とラティモアのパリでの再会のエピソードに登場する飾り鉢も含まれている。これらの品は、現在、大阪大学箕面キャンパス内の大阪大学付属図書館に所蔵され、希望者に公開されている。

同じ日、磯野富士子先生は、大阪外国語大学のリレー講義に、ゲストとして参加して下さった。

以下は、インタビュー形式で行われた講義の録音テープを起こして作成したテクストから、主に、『オルドス口碑集』に関する部分を抜き出したものである。

当日の講義担当者で聞き手を務めた芝山の発話は適宜簡略化したが、磯野先生の発話部分は改行、句読点を入れたのみで、改変していない。但し、読者の便宜のため、()内に文意を補う補足情報を入れ、若干の注を付した。

この対談での磯野先生の発言は、一見、すべて既知の情報の繰り返しのように思われるかも知れないが、微妙なニュアンスも含め、先生とその業績を理解するために重要な情報が含まれている。(芝山 豊)

(前略)

芝山 ……では、どうして先生がモンゴルを研究なさるようになったかのお話を。

磯野 全く困ることは、私はモンゴルに縁ができようとは、お嫁にやられるまで全然知らなかつた、思いもしなかったんですよね。女学校時代には地理と歴史が、殊に東洋史が嫌いというよりも、もう興味がないというか、関心がなかつた。でも日本女子大の附属高等女学校でしたから、勉強しなくともね、追い出される心配なかつたんです。だから、好きなことだけしていれば良かったんで、そして、だから、モンゴルに、主人が結婚して1年半くらいの時に、急に江上波夫先生がうちにいらして、長広舌をおふるいになって、先生がお帰りになったら、(主人が)「蒙古に行く」って

言い出したんですよね。それで、私はその頃、蒙古なんてどういう所にあるのか、そう定かではなかったし。まあ、それだから全然自分で選んだ道じゃなかつたんです。それで、本当にモンゴルに行つても、家族(論)にしても、みんな潜りなんですね、私。正式に免状といいかなんというか、持つているのは英語、英文学だけなんです。他には何



大阪外国語大学 講義にて

の資格もない。それで、まあ、モンゴルに連れて行かれまして、で、今の方はびっくりなさるかもしないけれど、その主人が行くって決めた時に、「君どうする?」って聞かれた覚えがないですね。だから、勝手に決めて。。だから、そして、しかも行くまでに時間が短いし、モンゴル語なんてのは、全然知らなかつたし、それでその昔の、あの、今は小沢さんの『モンゴル語4週間』になつてますけれども、昔は、構松先生の『蒙古語4週間』というのをまず買って、あれは、4週間にただちぎつてあるだけなの。だから、たいしてあんまり、そんなこと(いっちゃんいけないけど)。それに引っ越しもしなくちゃ、むしろ行くのに準備しなくちゃならないでしょう。家のこともね。それからその中国というのがあるけど、中国でしょう。それも、その準備もなしにモンゴルに行っちゃつたわけなんですね。勿論、内蒙ですけど。その頃は、今、芝山先生がおっしゃったように、その日本の軍が、アジア、あの頃北の方ですけどね、中国や満州国、蒙古聯合自治政府というのも、日本の、まあ、蒙古自治政府だったけど、結局、日本の軍人たちが行って、そして、傀儡、徳王は、本当は、傀儡になりたくなかつたんだけど、他にしかたがなくて、日本と、言うなりに(ではなく)、なるべく内輪に、協力の度をなるべく少なくしようとしていたんだけど、結局、あの孤立無援で。。。もちろん、皆さん、「旗」というのご存知でしょ。ホシヨーね。本当のノヨンね、王侯だの、それから本物のゲゲン、本物っていうか、活仏だのが、実際に機能していた時代なんですね。だからIII. ナツアグドルジの、つまり今のモンゴル国のもうシニアな学者たちでも、実際にそういう社会が機能していた時代というのは、よく覚えていないとか、知らないとかっていうので、そういう点で、ある点で、そのモンゴルの昔の社会っていうのを知らない、(知っている)人がもうほとんどいなくなっている時に、まあ、モンゴルのウ

ジムチンという (*芝山に向かって) ちょっと説明して。

興安嶺のこっち側で、一番あの、そのころの外蒙に接した、あそこが一番古い慣習が残っているというので、行ったのですけど。それで、まあ『冬のモンゴル』(で書いた) みたいに、およそ冒險的じゃなくて、そして寒いのが大嫌いだったのに、ラクダの車で、3晩4日、野宿して、行かなきゃ



『冬のモンゴル』の頃の磯野御夫妻

ならない羽目になっちゃつたんです。

(芝山さんが) あの人形のことまで覚えてらっしゃるなら、(人形の) レナを連れて来れば良かつたわね。なにしろ、幌つきの。。『冬のモンゴル』に書いてあるから繰り返すことありませんけどですけどね。それで、まあやっと、ウジムチンに着いたけど、そこでお世話になった方は「旗の顧問」とっていうと、みんな知らない人は、モンゴルのこと知らない人は、「キノコ?」っていうんですけどね。旗って、ほら、あの昔、説明しなくていい? (*「大丈夫です」の答) その旗のいろんな所に、みんな日本軍関係の、特務機関といって分かります? (*「分かるでしょう。」の答) 特務機関の人が顧問になって入っていたんですよね。それで、あの蒙軍の、ウジムチンにいたところにも、軍の、蒙軍の顧問として、結局、日本の側か

ら、その正式に(法的にではないけれど)、実質的にはコントロールしていたんですね、その各旗に王侯が、その頃のウジムチンのノヨンはまだ子どもだったけれども、子どもじゃなくても、方々にお目付け役みたいなのがいて、それで監督して、日本の(*一語不明)というか、都合のいいようにやっていたわけなんですね、それで我々も行けたわけなんですね。全体としてビザがどうのこうのという時期じゃなかったけども。

(中略)

芝山 モスターント神父様のことをお話し下さいますか。

磯野 それはね、モスターント神父様は、あの始めにモンゴルに行った時に、北京をとっていくわけでしょ。その時に、あれは服部(四郎)先生、江上(波夫)先生か、ともかくそのモスターント神父様がいらっしゃるというわけでね、まあ、私はモスターント先生もオルドスも、全然オルドスなんてどこにあるのかも知らなかったわけだけど、北京で少しおじの所にいた時に、小林さんて、考古学やっていらした方がいらして(小林知生、南山大学名誉教授)、その方がペル・モスターントの所に連れて行ってくださった。モスターント神父様は。

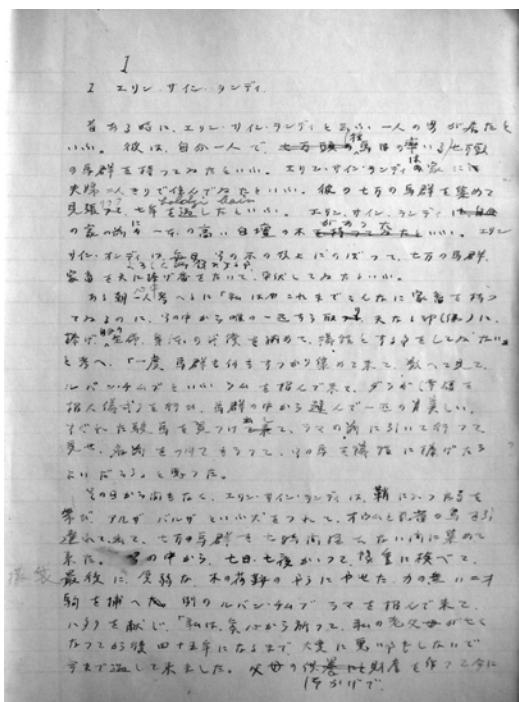
日本の特務機関の中だったと思うんですよね、の方は、かなり有力な方が、そして、こっちのモンゴルとか研究してらした方、トルコが主だったかしら、その方が、関東軍と掛け合って、(モスターント神父様は)ベルギーの方で、敵国でしょ、ベルギーは。だから他の人が抑留というのか、北京の中の一ヶ所に集められてそこから出られなかったんですね。それで、モスターント神父様のことを知っていた方が「スミ」さんて、鷺を見るって書いた方、(鷺見東觀愛知教育大名誉教授、

2008年没)、やっと後で分かったんですけどね、その方が、関東軍の、占領日本軍と交渉して下すって、それで、あの北京のカトリック教会の中の神父様たちのいらっしゃったところの、小さな、8畳もなかつたんじやないかしら、部屋に、そこで研究が続けられるように計らってくれて、それで、我々はもう、モスターント神父様の所に外から来る人も、別にあんまり邪魔もされないでいかれたんです。

それで、その小林さんていう考古学の方が最初に連れて行って下さったんです。我々がこれからモンゴルに行くって言ったらものすごく喜んで下すって、それで(訳書で)ご覧になったかどうか知らないけど、そこで、まるでパンフレットでも渡すようにオルドス辞典ね、フランス語とオルドス語のこんなでかいのよね、それを2冊と、それとオルドス口碑集ってというのも、一抱えあるでしょ、あれを下さった。本当、ポンと下さっちゃった。まだ何も始めてないのに。

それでこっちはモンゴル語も何も知らないし、行っちゃったもんですからね。それでフフホトに行ってから、私はモンゴル語をやるために、オルドス口碑集を読んで、訳して、まあ、訳すというよりも、始めは忘れちゃわないように書いていったんですよね。それで、随分モンゴル語の助けに、まあオルドス方言ですからね、ハルハとかなり違うところありましたけれども。またモスターント神父様は言語学の方が専門でいらっしゃったから、本当の専門は宣教師だったんでしょうねけれども、(言語を)研究をしてらしたもんだから、モンゴルのその頃はテープレコーダーなんかもちろんない、19世紀の終わり頃から20世紀の始めにかけてオルドスに入っていらして¹⁾、それでその聞いた言葉を、特別な、普通のローマ字じゃなくて、言語学者だから、こう、普通のフォニームね、何ていったっけ、普通の言葉で書けば同じ字に入るところでも、その前後によって多少音が違ってく

るでしょ。同じ「アー」っていうんでも。それを詳細に分けて書いてあるから、実は、それから字引をお作りになったから、転写の、(方法を)見つけるのを大変だったんですって。それでその字引がオルドス語を転写したのと、フランス語訳なんですね、訳って。そのオルドス語をフランス語で字引に作ってあるから、私はその頃フランス語は全然知らなかったっていってもいいくらい。それでオルドス語をオルドス辞典からフランス語を、単語ですからね、引いて、フランス語から仏和を引いて二重でしょ。それで、最初、説話の最初が、エリン サイン オンディ ゲジ ネッグ フン バイサングリ、その一行を、それこそ、蘭学事始じゃないけど二三日かかるって、やっと、昔、エリン サイン オンディって人がいたんだなと納得するまで二三日はかかるって。それは厚和(フフホト)にいる時に始めて、それはその今の飛行機じゃないから、全部でっかいオルドス口碑集も



『オルドス口碑集』翻訳ノート 1 頁目

辞書も全部ウジムチンまで持っていたからなんですね。厚和でもそれを続けていて、奥でもやって、それで、日本語と似ているから、ある程度ね、わりと終わりになってから速くなったんですけどね。それが私のモンゴル語。だからモンゴル語の学校行ったこともないし、だからあの構松先生の4週間と。

それから、まあ、奥に行ってモンゴルの人達と実に惜しいと思うのはね。

通訳を使ったインタビューっていうのは、我々はあまり信用しないし、ラティモアも、後で、そりやまったくそうだと言ってね。ラティモアがフィッシュキン・タタル('Fishskin Tatars')ってね、何だ、黒竜江の今の中のモンゴル地帯の一番北で黒竜江のそばにシャケの皮かなんかで着るものや何かを作っていた部族がいるんですね。その調査に、彼は中国語の方が先に(学習)してたから、中国語は(よくできる)。そしてその彼の時代はフィッシュキン・タタルの人たちも中国語は分かる、それで中国語でインタビューするとあなたとは話しが通じるって、それで、この間どっかの国の人人が来たけど、いいかげん気に入りそうなことを言っておいたよというようなわけでね。それは確かに調査っていうこと分からぬじゃない。現地調査っていうものがね、それで警戒するでしょ。一番あれなの、税をとるためにやないかと。それはもっともなことなんですね。それは、後で聞いたんだけど、我々は通訳を通した現地調査っていうのは、(通訳は)あてにならないんで、こっちがモンゴル語ができなくても、ともかくできるだけモンゴル語で。

で、殊に、その頃、日本人がいかなったことはあっても、その頃、日本語できる人というのはやっぱり大東亜共栄圏的な人だからどんな風に通訳するか分かんないじゃない。それだからもっと長いられたら、もうちょっとちゃんとした調査ができたんだと思うんですけど。それで結局、半年

ちょっと、半年ぐらいの間だったから、本当に『冬のモンゴル』なんてものは、あれは調査記録じゃなくて、日記が、幸いそのモスタート神父様や、グロータス神父様のおかげで、手元に戻ったんですよね。引き揚げの時は、書いたもの一切持つてっちゃいけなかったから。それで、あの、だから、あれは全然学術的なものじゃないから、そのおつもりで読んでいただきたいんですけど。ただ、まあ、ノヨンだとか、活仏なんかが、どんな風になってやってたかっていう一端はね（お分りになると思う。）お正月は、あれが内蒙古でも昔ながらでやった最後のお正月だったと思うの。

（中略）

芝山 ブリティッシュ・カウンシルの奨学生でイギリスに行かれて被爆者の通訳ボランティアみたいのをなさったでしょ、ブリティッシュ・カウンシルが反対したにも関わらず・・・。

磯野 それ、昨日話したっけ？

芝山 それはみんな知っています。婦人団体との関わりで、女性の問題も重要なのですが、先生のモチーフとしてあるのは家族の問題。古い日本の家族ですね、家族の問題と個人の問題というのは常に関心があつて・・・。

磯野 （私は）被害者だったのよね。戦後になって主人の付き合いもあったし、あの結局、私自身が親との考え方があんと違つて、そのズレが新教育で全国的になつたんで、お母さんたちの。それだから、私は、旧家族制度でやりたかったことは、英文学の方だったんだけど、やれなくて、そして、とつ捕まって、お嫁にやられちゃつて、それから蒙古へ連れていかれて、それから帰つて来たら蒙古というものは何にも問題にならなくなつ

て、でもう行くことができなくなつたでしょ、戦後すぐ、あの頃はね。

そしたら家族制度になって、それで家族制度がいかに被害を及ぼしたかということや、親子のズレがどういうものかやっているうちに家族関係論というのになっちゃつて、それで女子大で家族関係論、それから社会事業大学ということで、時間講師だけやっていて、そして、夫婦で共学、夫婦共学というも楽じやない、どっちかが転業しなきやならない。主人があの頃、今、筑波になった教育大学で民法やってたから、彼が廃業したら飯の食い上げでしょ。だから、転業するとしたら、私が転業しなきやなんなかつた時に、江上（波夫）先生が「モスタートのあれはどうなりました？」とおっしゃつたから、初め、あんな膨大なもの出してくれる人なかつたし、「あのまんまになつてますって」言つたら、「ペル・モスタートがお元気なうちに何か出しておいた方がいいじゃないですか」って言って、ほんの一部を、東洋文庫で、平凡社の東洋文庫で出してくれて。

だけど、面白かったのはね、モスタート神父様のフランス語訳の『オルドス口碑集』の、フランス語訳は全訳が出て、やっぱりあの同じ輔仁大学の方で出ているんですけど、要するに歌ね、ドー（歌謡）だとか、いろんな、なぞなぞとか諺、そういうのね。殊に歌は、ほとんどそのように訳せないのね、フランス語と全然違うでしょ文脈が。ところが日本語はね、かなり近く訳せたんですね、モンゴル語だからね。だからそれだけはフランス語訳よりも元に近いと思うけれど。だから、私は、転業に転業を重ねて、結局、何も虹蜂取らずで、82歳までなつちやつたわけ。

（中略）

磯野 なぜ、ラティモアのところにいたかっていうと、東京外大で坂本是忠さんが学長になった

時に、その歴史とか、何か言語じゃないことをや
りに来てくれないかと、時間、非常勤じゃなくて、
本当になってくれないかと来たんだけど、ラティ
モアをもう、決めちゃったものをちょっと見捨て
るわけにはいかなかったし²⁾、もうひとつはラティ
モアの蔵書というものが、方々のヨーロッパの有
名な図書館にどれかはあっても、ラティモアの蔵
書ほど揃っているのはなかったんですよね。それ
がいつでも自由に使えるでしょ。それで、それが
大いに魅力であったし。それで、私は、初めはモ
ンゴルの革命の頃をやるつもりだったんだけど、
アンダっていうのは本当に義兄弟かしらと思った
り、クリエンなんて、ああいう形で遊牧がなりたっ
たのかしらとか、やっぱりね、ちょっと母とうま
くいかなかったことからつながっているのかもし
れないけど、天邪鬼で、通説になっていることが
あって、つい、それ本当かしらと思うと、ひっか
かるというかになって、それだって、ラティモア
の蔵書が揃っていたから、方々の図書館ね、大き
な、主に英国とフランスだけど、一番大きな図書
館に行っても、あることはあっても揃ってない。
さんざん巡り歩かなきゃならないのが、こう、と
れるわけでしょ。すぐそこにあるわけでしょ。それ
が魅力で、ついつい世話に、結局、世話もする
ことになっちゃって。だからそういうたら悪いかも
しれないけど、ラティモアってのは、えらい頼
りになるしっかりした人だと思ったけど、いかに
世話がやけてということが分かって、私、ラティ
モア知らないほうがよかったかも知れない(笑)

でまあ、ラティモアがあれだし(*亡くなつて)、
うちもそういうこと(*ご主人の体調を考え、目
白のお宅を整理されること)になったんで、家族
(の研究)もモンゴル(の研究)も全部放り出して、
方々しかるべきところに(それらの資料を)送りつ
けて、今の所(高齢者用ケア付マンション)へもつ
ていくのは、英文学やなにかで読みたくて読めな
かった、英語ばつかしじゃないの、読みたくて読

めなかつた本だけ。だからこちらでも、元来、芝
山さんのところへ渡して、それだけで帰るつもり
だったら、運ぶのに芝山さんがこう東京へ回って
いらっしゃるというので、これ幸いとばかりに、
来て、もっていただいて、というわけ。まことに
ご期待に添えません、申し訳ないですけど、そ
ういうちょっと変わってて、何ともかんとも説明の
しようのないことで、82(歳)にもなりました。

(中略)

芝山 『オルドス口碑集』のこと、私が非常に
印象に残っているのは、先生が全部綴じを剥がし
てしまわせて・・・

磯野 剥がしてっていうんじゃなくて、何べん
もやっているうちにボロボロになっちゃった。

芝山 ボロボロになっちゃって、それをお布団
の・・・

磯野 キレもない時代で戦後でしょ。だからお
嫁入りの時の布団だって、もうすでにスフ。まあ、
本当の絹や木綿もなかった頃だから、それを貼つ
て布団のように縞が入っているんだよね。いかに
も布団布団している。



布団の布で綴じられた『オルドス口碑集』

芝山 それをお使いになって大学ノートにですね、訳をビシッと書かれているわけです。その大学ノートのほんの一部が今先生お話しになったこの東洋文庫のシリーズの中に納まっているわけですね。だけど、入ってない方が多いわけですよね。

磯野 10分の1くらい。

芝山 是非、全部印刷したいと思っているのですけど。

磯野 原稿というのかあの頃もちろんワープロも何もないでしょ、それでボールペンというのが始めて、ボールペンの古いの、時がたつとにじんじゅうのよね。それでまた、私は稀代の悪筆で、あれは捨てちゃおうかと思って。

芝山 捨てちゃだめです！

磯野 そしたら、芝山さんが文学の方に興味がおありになるというので、それと芝山さんと親しくなったから、「芝山さんならいいや」と思って、送りつけちゃったわけ。

芝山 私がもらって密かに何点かだけ自分が訳したようにして出すこともできますけど・・・。

磯野 構わないわよ。

芝山 そういうことをしては磯野先生の学問に対する教えに反することになりますから。なるべくたくさんの人々に知らしめて、共同で先生の原稿を起こして、なんとか出版したいと思っています。

磯野 でもね、あれはちゃんともういっぺんやってないから書きっぱなしだからね、専門家がご覧になると違っているところ、うんと、まあ、

あの仏訳とか一応は（比較検討したん）でしたけれども、本当に捨てちゃおうと思った、寸でのことです。

芝山 危ないところでした。

磯野 これもらってくれる人、送り付けるところなんかないし、ボールペンのは、にじんじゅうて字はメチャクチャだし。

まあ、でもね、あれの『オルドス口碑集』の、これ（＊東洋文庫版を手に）出た時から、護雅夫さんが、なんだっけ、「なんとかするほど文句が多い」っていうの書評にね、書いてくださったのよね。何だっけ、知らないほどじゃない、なんとかこういうことを言ったら、そのモンゴルの諺を使って、やりこめられるかも知れないとか。それだから、かなり面白い諺やなんかあるんですのよね。わりとこう使ってましたね、あの頃は。

あの、そうか。ボーバクシというボルジギンの後裔の人がウジムチンにいたんですね。ボーバクシって、みんな言ってましたけどね。そんな人が言ったのは、私は、やっぱり言葉わりと覚えるもんだから、モンゴル人がね、カトン（＊高貴な女性へ敬称）なんてのは、それこそね、大変なカトンだと思ったら、我々も日本人で、日本人がいばっていたか知らないけど、私はカトンと呼ばれていたわけよね。それでカトンの方がバクシ（誠一先生）よりもモンゴル語がうまいって言ったからさ、私はそんなこと言っちゃダメよと言ったんだけど、そしたらそのボーバクシが「ウヌン ウグ ソンソート オールラフブル メルゲンファン ビシ」（眞実を聞いて、怒るのは識者ではない）って言ったのよね。そういうふうにボーバクシだったからかもしれないけど、その頃はわりと諺みたいのをちょいちょいと出てくるというか。それから歌のことはね、ファーランガっていう宮廷樂士みたいな人が、樂士って、歌のね、16歳で、お

正月やなんかの時にまあ、ノヨンの所のお祭りで歌うわけじょ。そして、その人がね、なにしろね、恋歌なのよね、それを教えてもらおうとしたら、ボーバクシが、「カトンにそんな歌教えちゃいけない」って。いかにもボーバクシらしいんですけどね、ひとつ覚えたのは、(*一節を歌う)。つまり、荒地じゃない、山に生えるのは、オーランガザル、だからあの、オイラスンモドって、日本のと同じじゃないのかもしれないけど、柳の木の定め、そして、お嫁にやられてよその土地にやられるのはオヒン・フン、女、娘の定め、オヒン・フンの定めだっていうのは良かったらしいのよね、教えてもらって怒られなかったから。

だけどいろんなあんまりごちゃごちゃ転業に転業で、生きてきたもんですから、あんまりお役に立てなくて申し訳ない。ただひとつその一番モンゴル的な暮らしの最後の段階を見たということはね、やっぱり、III. ナツアグドルジさんなんかが、実際に見たことないところを、実際に見たということは、まあ、ただね、そういう、その、いい加

減なモンゴル語だったから、今思えば、もっとやれたのに、という気が時々するけど。でも、いま、ハーマーグイ(関係ない)と思ちゃう。

(後略)

註

1) モスタート神父のオルドス滞在が1906-1925であることは磯野先生自身が常に書いておられるので、ここでは多分、スクート会の宣教活動全体についてコメントしているものと思われる。

2) 磯野富士子先生は日本女子大、東京大学などの非常勤講師を勤めているが、専任の大学教員であったことはない。機会そのものが与えられなかつたと解する人もいるようだが、この発言はご本人がそれを望まなかつた部分もあったことを示している。尚、坂本是忠東京外国语大学学長の任期は昭和50年(1975)からの6年間。

(しばやま ゆたか)